復興を支えて

疲弊する応援職員 1

任期半ばの自死

慣れぬ業務、交流少なく

生い茂る雑草と残雪が大津波で流された家々の土台を覆っていた。東日本大震災から2年近くがたつ今も、荒涼とした更地が広がっている。

岩手県大槌町。今年1月3日、復興支援として宝塚市から派遣されていた男性職員＝当時（45）＝が車内で一礼した。

男性が大槌町の都市整備課に配属されたのが昨年10月。あと3カ月で任期終了という中での悲劇だった。「ご迷惑をおかけしました」。前日の仮住宅で自ら命を絶っているのが見つかった。同5日正午。役場前は喪服姿の人々があふれていた。クラクションを響かせ、亡きがらを乗せた車が通り過ぎる。碇川豊（いかりがわゆたか）さん＝が「どうしても分からない」と話し、こう漏らしたという。「誰にでも起こり得る事故。そんなふうにしか思えません」

◇　◇

大槌町役場から車で約45分、周囲に店舗もない同県宮古市の山あいの仮設住宅。12棟82戸に、被災者と全国からの応援職員が入居している。

見知らぬ土地での単身赴任。他の住民との交流はほとんどなかったようだ。ある住民は「応援職員は集まりにも参加しねえから」と言葉少なく、静岡市からの派遣職員もいた。

「うちは山田町の支援だから、彼のことはよく知らない」とうつむいた。

男性は部屋のカレンダーの裏に、遺書らしきメモを残していたという。

「皆さまありがとうございました。大槌はすばらしい町です。大槌がんばれ!!」

◇　◇

「岩手はスノーボードで行ったことがある」。同僚にそう語っていた男性は、宝塚市上下水道局の土木系技術職員として宅地造成などの開発業務を担当。震災直後に給水支援で大槌町を訪れた経験はあったものの、土地区画整理事業の用地交渉の業務は専門外だった。物腰は柔らかいが頑固な一面もあり、線が細いタイプではなかった」

大槌町は、職員136人のうち前町長ら40人が震災の犠牲になり、行政機能が停止。全国から応援職員を募り、現在は約70人が派遣されている。

昨年2月。宝塚市への要請に、男性を含む2人が手を挙げた。半年交代で、男性は10月以降の残り期間を担っていた。

上司が振り返る。「仲間から信頼され、職場のムードメーカーでもあった。なぜ自ら命を絶ったのか。その理由を知りたくて、取材を重ねた。

（安藤文暁、上田勇紀）

◆　◆

東日本大震災から2年。被災自治体で復興業務に携わる職員らが疲弊している。まちを取り戻そうと駆けつけた人が、のしかかる業務量や住民との板挟みで心を病み、命を絶つ。震災直後と同じ光景が繰り返されている。

職場がむしばまれていく。

職場が壮行会を催そうとしたが、男性は笑って固辞した。「派手なことはいらんです」

岩手県大槌町の役場庁舎。復興はまだまだ進まず、周りには更地が広がっている

復興を支えて

疲弊する応援職員 2

一変した生活

人員不足、残業80時間超

岩手県大槌町役場。庁舎が大津波の直撃を受けたため、小学校の校舎を改修して庁舎とした。

その2階に、宝塚市から復興支援として派遣中に自死した男性職員＝当時（45）＝が在籍した都市整備課がある。入り口に同課の配置表が張られている。34人のうち課長はじめ21人が応援組だ。

電話が鳴り続け、職員が慌ただしく地権者との面会日程を詰めていた。

「ようやく用地交渉が本格化してきた。忙しくてほとんど休みもない」と幹部。ただ、宝塚の男性に話が及ぶと、言葉を濁した。「みんな理由が分からず、悩んでいる」

◇　◇

2011年3月11日。津波は旧庁舎2階天井近くに達した。1階玄関前に構えた災害対策本部は流され、職員136人のうち40人が犠牲に。11人いた課長級は7人が死亡、その後3人が定年退職した。全国に応援職員の派遣を募ったが、今も定員に13人足りない。

都市整備課の前身、地域整備課14人のうち、生存者はわずか2人。うち30代の男性は昨年3月に自死した。別の部署では、地元職員2人が心身の不調で長期療養中だ。総務部幹部がつらい心境を語る。

「地元の職員も疲れ切っている。多忙で慣れない業務に戸惑う応援組の事情は分かるが、目配りできる状態になかった」

◇　◇

阪神・淡路大震災後、神戸市ではまちづくりの担当職員がピーク時に約200人いた。大槌町は34人で区画整理や高台移転など、神戸とほぼ同規模の事業面積を手掛けなければならない。

マンパワー不足は明らか。

「2カ月以上にわたり月80時間以上」という厚生労働省の「過労死ライン」は赴任当初の10月が76時間30分、11月が95時間30分、12月も84時間15分。

◇　◇

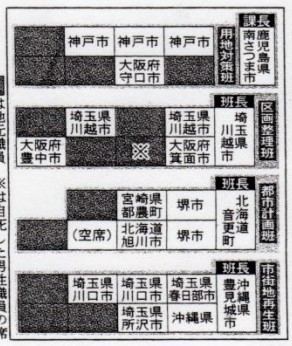
埼玉県川越市の上下水道局から派遣された男性職員は、宝塚の男性と同じく都市整備課で専門外の用地交渉を担う。「地権者への土地価格の通知など何度も戸惑ったが、幸い職場に同郷の職員が2人いて相談できた」

宝塚市からの派遣は男性1人だった。仕事熱心だったという。約30キロ離れた仮設住宅と職場を車で往復し、しばしば休日も返上した。仮設住宅では当初、職員同士の食事会もあったが、男性の入居後間もなく幹事役が派遣元に戻り、途絶えた。

大槌町が応援職員向け宿舎として町内に借り上げた民間アパートに入居する日の前日、男性は自ら命を絶った。

関東の自治体から派遣されている同僚職員が悔やむ。「被災者と向き合うのは誰もがつらい。話を聞くだけで涙が出るし、頭から離れない。だからこそ、職場のみんなで励まし合ってきたのに」

（安藤文暁、上田勇紀）



■は地元職員　※は自死した男性職員の席

■大槌町都市整備課の応援職員の派遣元自治体

男性が暮らしていた仮設住宅。見知らぬ土地で安らげる場所はあったのか＝岩手県宮古市